

論文要旨

担当教員	永田 智子 山本 なつ紀	学籍番号		氏名	高鍋 佳奈美 土志田 瑞希
高齢者の通所サービスへの日々の「通い」をどう支えているか					
【研究目的】 通所サービスは、地域で暮らす高齢者の増加が見込まれる本邦において、心身の機能維持や社会参加の機会を提供する居宅サービスである。本研究では、通所サービス施設スタッフが、通所サービスへ的高齢者の日々の通いを支えるために行なっている支援を検討した。					
【研究方法】 2020年6月～9月の期間に、通所サービスを提供している施設3カ所のスタッフ計7名に、「通所サービスへ行くのを渋る利用者への働きかけ」や、「利用者が継続して利用したくなるような工夫」について、半構造的面接とメールでの追加質問を実施した。その後、インタビュー内容を逐語化し、コードを作成し、支援内容について類似するコードをまとめ、サブカテゴリー、カテゴリーを作成した。					
【結果】 分析の結果、高齢者が日々通所サービスに通うことを支えるために施設スタッフが行なっている支援内容は、7つのカテゴリーと21のサブカテゴリーが抽出された。 【利用者にあった支援を提供する】では、利用者の目的やニーズを施設で満たすことができるのかを確認するとともに、利用者の状況に応じた支援を計画することで、利用者に応じたサービスや支援を提供していた。【利用者のことを理解する】では、利用者の全体像を把握し、やる気スイッチを見極め、変化に気付くことで、利用者に対する理解を深めようと努めていた。【利用者のことを尊重する】では、利用者一人一人に合わせた対応をするとともに利用者の意思決定や気持ちを尊重していた。【快適に過ごせる場にする】では、施設スタッフは丁寧な態度で接することで利用者に嫌な気持ちを抱かせないようにしていた。また利用者の好みに応じられるようにする、利用者の関係性を整える、利用者の居場所作りを行なうことで利用者にとって施設内で過ごす時間が心地よいものになるように働きかけていた。【無理なく通い続けるための支援を行なう】では、施設スタッフは無理なく自宅から施設へ通うことができる体制を作ったり、通い続けるための健康管理を行なったりしていた。【行こうという気持ちにさせる】では、利用者が施設へ行くことを前向きに捉えることに加えて、施設に行くという方向に気持ちが変わるようにする、やる気スイッチに働きかける、通い続けることを賞賛するということをしていった。【行きたくない利用者の背中を押す】では、消極的な過ごし方を提案したり、利用者に「行かなくてはいけない」という状況を理解してもらえるように働きかけたりすることで、施設スタッフは行きたくない利用者の背中を押していた。 21のサブカテゴリーを時系列で並べると、「利用開始までのプロセス」、利用開始後の対応としては「施設内での関わり」、「お迎え前の働きかけ」、「玄関先での駆け引き」に大きく分けられた。					
【考察】 本研究において支援内容を時系列に沿って並べることで、利用開始前から利用者のニーズを評価していることが明らかになった。このことから「通い」を支えるための支援は利用開始前から始まっていることが示された。これまで通所サービスを利用する高齢者は、サービス利用の必要性や利用中止の判断を、自分の健康観や健康状態と、サービス利用目的とを比較検討して行なうことが示唆されている。本研究で示された「利用開始までのプロセス」では、利用者の本来の利用ニーズを明確にしている。このような支援を行なうことは、利用者自身の主体的なサービス利用開始を支持し、通所サービスの利用継続に繋がると考えられる。 またサービス利用開始後では、施設内での支援だけでなく、自宅から施設に行くまでの支援として「玄関先での駆け引き」が行なわれていた。利用者は日々、家族や友人との関係やライフイベントなどの影響を受けながら生活している社会的な存在のため、事前に施設スタッフが適切な支援計画の立案や、人的・物的環境を十分に調整していたとしても、常に通所サービス利用に対して前向きであるとは限らないと考えられる。そのため、その日の利用者の気持ちの変化に寄り添いながら利用を促すために、様々な工夫を凝らした支援が行なわれていたと考えられる。					

論文要旨

担当教員	野末 聖香	学籍番号		氏名	土肥 由莉
リフレクションを用いた新人看護師教育に関する文献レビュー					
<p>【研究背景・目的】 看護師には、医療技術の進歩や時代のニーズに応じて、複雑かつ多様な看護実践能力が求められ、看護実践能力向上のための教育方法を確立していくことは重要である。リフレクションは、家族療法の考え方を原点とし、ノルウェーの精神科医によって提唱された概念であり、対話などの他者との相互作用によって刺激を受け、自身の行動や感情を意図的に振り返り、内的な吟味及び探求をする思考過程を指す。リフレクションは看護教育にも取り入れられており、早期職場適応や専門職としての大きな成長が求められる新人看護師教育においても活用されている。しかし、その内容や効果については十分に明らかになっていない。そこで、新人看護師教育におけるリフレクションの内容及び手法とその効果を明らかにするために文献レビューを行った。</p> <p>【研究方法】 文献レビューとする。リフレクションを用いた看護教育について 2012 年までの文献レビューがあるため、2013 年から 2020 年に発表された原著論文に絞り、論文を検索した。医学中央雑誌 web 版を用いて、「リフレクション」「新人教育」「看護」をキーワードとし AND 検索を行った。</p> <p>【結果】 文献検索の結果、51 件が抽出された。題名と抄録を熟読し、研究目的に合ったものを抽出し、最終的に計 5 件を対象とした。対象者は、新人看護師とプリセプター等の先輩看護師に分けられ、新人看護師研修等の教育場面において活用されていた。リフレクション手法としては、日記やシートなどのツールを活用して個人で内省した後、少人数での直接対話を行うものと、直接対話をせずツールを用いたものがあった。直接対話では、プリセプターと新人看護師の 2 名で行う場合や、集合研修の場面で 6 名以下の小グループに分かれワークや面接を行う場合があった。又、リフレクション方法に関して知識のある研究者や研修を受けた看護師がリフレクションを促進する介入者として加わり直接対話を行った。介入者は感情に焦点を当てた問いかけや開かれた質問をすることで相手の思考が進むように促し、非指示的で支援的な態度で関わっていた。リフレクションにおける効果として、新人看護師は、自身の能力の限界及び強みに気づき、自己否定的感情の軽減や成長への意欲に繋げていた。先輩看護師では、新人への関心及び理解の深まりや、指導における自信の獲得に繋がっていた。</p> <p>【考察】 自分の看護実践の場面やコミュニケーションを段階的に振り返ることで、自己の弱みと強みの双方を客観的に捉え自己理解を深め、成長への意欲をもたらすリフレクションは、新人看護師の教育方法として有効であると推察される。一方で、構成人数や介入者の要件等の設定が各施設で多様であり、統一されたリフレクションの定義や内容及び、プログラムの手法が確立されておらず、介入者の具体的な介入方法についても明確化されていない現状にあると考えられる。今後は、リフレクションの内容や技法の明確化及びリフレクションプログラムを精錬すると共に、適切にリフレクションを実施する能力を持つ人材の育成が重要であると考えられる。</p>					